

扉の向こう

Philip K. Dick, "Beyond the Door"

訳: 川村 真央

その夜、彼はそれを食卓に持ってきて、彼女の皿の横に置いた。ドリスは目を丸くしてそれを見つめ、手を口元に持っていった。「えっ、何かしら？」彼女は目を輝かせて、彼を見上げた。

「まあ、開けてみてよ。」

ドリスは胸を高鳴らせ、その四角い包みからリボンと包装紙を、伸ばした爪で引きちぎった。ラリーは立ったまま、ドリスが蓋を持ち上げるのを見つめていた。彼は煙草に火をつけると、壁に寄りかかった。

「鳩時計だわ！」ドリスは歓声を上げた。「本物の古い鳩時計だわ、母が持っていたものみたい。」彼女は時計をひっくり返しては眺めた。「本当に母が持っていたものみたい、ピートはまだ生きていた時の。」彼女の目は涙でキラキラと光っていた。

「ドイツ製なんだ。」ラリーは言った。そして一瞬の間をおいて、付け加えた。「カールが価値で売ってくれたんだ。あいつは時計職人に知り合いがいてね。そうじゃなかったらきつと……」そこで言葉を切った。

ドリスは、おかしな、小さな音を立てた。

「つまりさ、そうじゃなかったら、きつと買えなかっただろうな。」ラリーは顔をしかめた。

「どうしたって言うんだ？ 時計を手に入れたじゃないか、そうだろう？ これを欲しがってたんじゃないのか？」

ドリスは、指が茶色い木の部分にぎゅっと押し付けられるくらい、時計を握りしめて座っていた。

「なあ」ラリーは言った。「どうしたって言うんだよ。」

彼はドリスがはじかれたように立ち上がって部屋から走り出ていくのを―それも時計をつかんだままだ―驚いて目で追った。そうして、やれやれと頭を振った。「決して満たされない。女つてのはみんなそうだ。決して満足しないのさ。」

彼は席に着くと食事を終えた。

その鳩時計はそんなに大きくなかった。しかし、ハンドメイドで無数のフレット模様があった。小さな欠刻や装飾がやわらかい木に彫られていたのだ。ドリスは涙を拭きながらベッドに腰掛け、時計のねじを巻いた。針は自分の腕時計に合わせた。ほどなく彼女は針を九時五十八

「原文では"a cuckoo clock"だが、日本では一般に、カッコウ時計ではなく、鳩時計と呼ばれるため、ここではそれにならっている。時計の中の鳥は、鳩ではなくカッコウである。」

分まで慎重に動かしした。それからドレスサーの上に持って行って、そこに時計をかけた。そうして彼女は待っていた。手を膝の上で絡ませて。―カッコウが出てくるのを、カッコウが鳴く時間が来るのを待っていたのだ。

座っている間、彼女はフリーのことや彼が言ったことを考えていた。それから、この件について自分が言ったことも―どれをとっても彼女は悪くなかった。どちらにしても自分を弁護もしないで彼の話をずっと聞いているなんてできなかった。自分のことは自分でほめてやらないといけない世の中なのだ。

彼女は不意にハンカチを目にあてた。どうしてあんなこと言ったのよ、卸値で手に入れたんだ、なんて。どうして台無しにしなきゃならないのよ。そんな風に思っているんだったら、そもそも手にいれなくなっちゃったよ。彼女は両手をぎゅっと握りしめた。ほんとに意地悪だわ、ものすごく意地悪だわ。

しかし彼女は、格子柄のおかしな文字盤と扉がついたこの小さな時計が、そこでチクタク動いているのは嬉しかった。扉の中にはカッコウがいた。外に出てくるのを待っているのだ。耳を澄ませているのかしら？片隅で頭をびんともたげて、いつ出ればいいかを知ろうと、時計の音が聞こえるように耳を澄ませているのかしら？

外に出ない時は眠っているのかしら？まあ、すぐに会えるわよね。頼んだらいいんだもの。それからこの時計をボブに見せよう。きつと気に入るわ。ボブは古いものが好きだもの。古い切手やボタンなんかでも。たしかに少し不格好だけれど。でもラリーは長いことオフィスにいるし、ちょうどいいわ。時々ラリーがふらっと来たりさえしなかったら…。

ウィーンという音がした。時計が振動したと思ったら、突然扉が開いた。カッコウがすばやく滑り出てきた。彼はそこで止まって、いかめしくあたりを見回した。ドリスや部屋、家具をしげしげと眺めながら。

自分と顔を合わせるのこれが初めてだ、と彼女は気づいて喜びで顔をほころばせた。彼女は立ち上がって、はにかみながら彼の方へ足を進めた。「さあ。」彼女は言った。「待ってるわよ。」カッコウはくちばしを開いて、すばやくリズムカルにさえずった。それから一瞬の静寂の後に彼は戻っていった。そして扉がボタンと閉まった。

彼女は大喜びだった。手を叩いて小躍りした。最高よ、完璧だわ！それに、値踏みするように彼女をじっと見ながら、ぐるっと見回す様子といったら。彼は自分のことを気に入ってくれたんだ、と彼女は確信した。そしてもちろん、彼女の方も彼のことかひと目で好きになった。あの小さな扉から出てきたらいいなと思ったものものだったのだ。

ドリスは時計のところへ行った。扉のところへかがみこみ、唇を木の部分に寄せた。「聞こえる？」彼女はささやいた。「あなたは世界で一番素敵なカッコウだと思うの。」恥ずかしくなって一旦言葉を切った。「ここを気に入ってくれるといいんだけど。」

それから彼女は頭を高く上げて、再び階下へおりていった。

ラリーと鳩時計は、はじめから全然うまくいかなかった。ドリスは彼がねじをきちんと巻かなかったからだと言い、鳩時計の方は、いつも中途半端にしか巻かれていないことが気に入らなかった。ラリーはねじ巻きの仕事をドリスに任せた。カッコウが十五分ごとに出てくると、時計は無慈悲にも止まり、その都度、誰かがねじを巻いてやらなくてはならなかった。

ドリスは最善を尽くしたが、彼女は時間のことを、しょっちゅう忘れてしまった。そうなるラリーがうんざりしながら、仕方なしに新聞をバサツと置いて立ち上がった。暖炉の上の壁に時計が掛けてある、ダイニングルームへと入っていくのだ。時計を下ろすと、必ず小さな扉のところに親指を置いて、ねじを巻いた。

「どうして扉の所に親指を置いておくの？」ある時ドリスは尋ねた。

「そういうもんだろ。」

彼女は片眉を上げた。「本当に？近くに居る間、彼に出てきてほしくないからじゃないかと思っていたんだけど。」

「なんだってそんなこと思うんだ。」

「もしかして彼のこと怖いのかしらと思って。」

ラリーは笑い飛ばした。彼は時計をもとの場所に戻すと慎重に親指を外した。ドリスが見ていない時に彼は親指を上げしげと眺めた。

柔らかい部分に切り傷のような跡がまだあった。誰か―あるいは何が―つづいたんだ？

ある日、土曜日の午前中のこと。ラリーが特別大事な顧客のことでオフィスに出かけていた時のことだ。ボブ・チェインバースが正面玄関へやってきて、ベルを鳴らした。ドリスは手早くシャワーを浴びているところだった。体を拭くとバスローブを羽織った。ドアを開けると、ボブがニヤニヤしながら中へ入ってきた。

「やあ。」ぐるっと見回しながら彼は言った。

「大丈夫よ。ラリーはオフィスなの。」

「よかった。」ボブはローブの裾から出ている彼女のすらっとした脚を見つめた。「今日の君はなんて綺麗なんだ。」

彼女は笑った。「ちよっと！中に入れない方がよかったかもしれないわね。」

それから彼らは、半分はおもしろがって、半分はぎよっとして、お互いを見つめた。ほどなくボブが言った。「君が望むなら、俺は…」

「だめよ、何言ってるの。」彼女は彼の袖をしっかりとつかんだ。「玄関から離れてちょうだい、そしたらドアを閉められるから。ピーターさんが向かい側にいるでしょ。」

彼女は扉を閉めた。「それに、見せたいものがあるの。あなたが見たことないものよ。」

彼は興味をひかれた。「アンティークかな？それとも何だろう？」

彼女は彼の腕をとって、ダイニングルームへ連れて行った。「きつと気に入るわよ、ポビー。」彼女は瞳を大きくして立ち止まった。「気に入ってほしいわ。絶対よ。気に入るに違いないわ。」

私にとってはすごく大事なのー彼がすごく大事なのよ。」

「彼だって？」ボブは眉をひそめた。「彼って誰なんだ？」

ドリスは笑った。「妬いてるのね！ほらほら。」一瞬の後に二人は、時計の前に立って、それを見上げていた。「あと何分かしたら彼が出てくるわ。彼と会うまで待ってて。あなたたち二人は仲良くなるって私には分かるの。」

「ラリーは彼のことをどう思ってるんだ？」

「その二人はお互いが好きじゃないの。ラリーがここにいる時には出てこないこともあるのよ。時間通りに彼が出てこないよ、ラリーは怒るの。そして言うのよ……」

「何て言うんだ？」

ドリスは下を向いた。「ぼったくられたっていつも言うのよ、自分が卸値で買ってきたのに。」彼女は明るく言った。「でも彼はラリーのことが好きじゃないから出てこないんだって私には分かるの。私がここにいる時には、彼はちゃんと正確に出てきてくれるのよ、十五分ごとにね、本当なら一時間ごとに出てくるだけでいいのに。」

彼女は時計をじっと見上げた。「彼は望んで、私のために出てきてくれるのよ。私たち、おしゃべりするの。私が彼に色々話すの。私の部屋に持って上がりたいんだけど、それはよくないと思ってる。」

正面玄関のところから足音がした。二人はぎょっとしてお互いを見た。

ラリーがうめきながら玄関のドアを押し開けた。彼は書類かばんを下すと、帽子をとった。そこで初めて、ボブが目に入った。

「チェインバーズ。これは驚いたな。」と目を細めた。「ここで何してる？」彼はダイニングルームに入ってきた。ドリスは、後ずさりながらローブを力なく引き上げた。

「俺は……」ボブは口を開いた。「つまり、俺たちは……」彼は口ごもって、ちらっとドリスを見た。突然、時計がウィーンと音を立てた。カッコウが飛び出して、鳴きだした。ラリーは彼に向かって行った。

「この耳障りな音を止めるんだ。」彼は時計に向かって拳を振り上げた。カッコウは、ぼたりと鳴きやむと戻っていった。扉が閉まった。「これでましになった。」ラリーはドリスとボブをじっと見つめた。みな無言のまま立っていた。

「俺は時計を見ようと思ってきたんだ。」ボブは言った。「ドリスが言ったんだ、珍しいアンティークで、それに……」

「くだらん、それは俺が自分で買ったんだ。」ラリーは彼のところへ詰め寄った。「出ていけ。」そしてドリスに向き直った。「お前もだ。それから、あのいまましい時計も持っていくんだ。」

彼は言葉を切って、顎をなでた。「いや。時計はここに置いていけ。それは俺のだ。俺が金を出して買ったんだからな。」

ドリスが出て行って数週間の間に、ラリーとカッコウとの仲は、以前よりいっそう悪くなった。

一つは、カツコウがほとんどの時間、一番忙しくしていたはずの十二時でさえも、閉じこもったままだったからだ。たとえ、ようやく出てきたとしても、たいていは一、二度鳴くだけで、正しい回数鳴くことは決してなかった。加えて、彼の声には不機嫌で、非協力的な響きがあった。ラリーを不安な、そして少々腹立たしい気分させる、耳障りな音だった。

しかし、彼は時計のねじを巻き続けた。家の中は静まりかえっていて、あたりをバタバタ走ったり、話したり、物を落としたりする物音が聞こえないということが、神経にさわったからだ。そして時計の機械音でさえも、ラリーの耳には心地よく聞こえたのだ。

しかし、それでもラリーはカツコウが好きになれなかった。そして彼に話しかけることもあった。

「いいか。」彼は、ある晩遅く、閉ざされた小さな扉に向かって言った。「聞こえているのは分かっているんだ。俺はお前をドイツ人のところへ戻さなくちゃならない―シユバルツバルトへな。」彼は行ったり来たりした。

「あいつらは今どうしているんだろうか、あいつら二人だよ。本とアンティークまみれの、あの若造め。男っていうのはアンティークになんか興味を持つもんじゃない。あれは女のものだ。」

彼は奥歯をかみしめた。「そうだろう?」

時計は沈黙していた。ラリーは時計の真正面まで歩いて行った。「そうだろう?」と尋ねた。

「何か言うことはないのか?」

彼は文字盤を見つめた。もうすぐ十一時だ。十一時ちょうどまで、あと数秒だった。「いいだろう。十一時まで待ってやる。そうしたら、お前が何というか聞くからな。あいつが出て行つてからの何週間か、お前はずいぶん静かじゃないか。」

彼は口をゆがめて歯を覗かせた。「あいつが行ってしまったって、おまえはそれが気に入らないのかもしれないがな。」彼は顔をしかめた。

「まあ、俺が金を出してお前を買ったんだ、だからお前は、気に入らんと気に入らまいと出てくるんだ。聞いているのか?」

十一時になった。遠くの方、街の端で、時計塔が眠たげに鐘を打った。しかし、この小さな扉は閉ざされたままだった。何一つ動かなかった。分針が動いても、カツコウは出てこなかった。彼は時計の中のどこか、扉の向こうで、隔たったところで沈黙しているのだ。

「いいだろう、そういう気分ならな。」ラリーは、唇をゆがめてつぶやいた。「だが、それはフェアじゃないぞ。出てくるのがお前の仕事だろう。俺たちはみんな、気に入らないことでも、やらなきゃならないんだ。」

彼は不機嫌にキッチンへ入っていき、大きなピカピカの冷蔵庫を開けた。飲み物を注ぎながら、彼は時計のことを考えた。

それについては間違いない―カツコウは出てこなきゃならない、ドリスであろうとなかろうと。あいつはドリスが初めからずっと好きだった。あいつらは、あいつら二人は仲良くやっていたんだ。たぶん、ボブのことも好きなんだろう―たぶんあいつは、ボブと知り合いになるく

らいには会っていただろう。あいつらはみんなできっと幸せになっていたんだ。ボブとドリ
スとカツコウで。

ラリーは飲み終わると、シンクの引き出しを開けてハンマーを取り出した。彼はそれを慎重
にダイニングルームへと持って行った。時計は壁で静かに、時を刻んでいた。

「見ろ！」ハンマーを振りながら彼は言った。「俺が持っている物が何か、わかるだろう？
これで俺がこれからどうするつもりか、わかるだろう？お前からやってやるぞー最初にな。」
彼は頬をあげた。「似たり寄ったりの鳥だ、それがお前たちだろうーお前たち三人だ」

部屋は静かだった。

「出てくるか？それとも俺が入って行って、捕まえなきゃならんのか？」

時計はかすかにウイーンと音を立てた。

「そこにいるのは聞こえているんだ。話ならたくさんあるだろう、この三週間分のな。俺の
計算じゃ、お前は俺に借りが…」

扉が開いた。カツコウが、素早く、彼めがけて出てきた。ラリーは下を向いて、眉を寄せて
考えていた。彼がぼつと顔を上げると、カツコウがちょうど目の前にいた。

彼は下に落ちた。ハンマーも椅子も何もかも、床に打ち付けられてすさまじい音を立てた。
一瞬、カツコウは、小さな体を硬直させて動きを止めた。それから、家の中へ戻っていくと、
扉がぴしゃりと閉まった。

この男は、床で、グロテスクに横たわっていた。首が片側に折れ曲がっていたのだ。身動き
するものは何もなかった。部屋は完全な静寂だった。もちろん、時計のチクタクいう音を除い
ては。

「わかりました。」ドリスは硬い表情で言った。ボブは落ち着かせようと彼女に腕を回した。

「先生。」ボブは言った。「二つ聞いてもいいでしょうか？」

「もちろんです。」医者は言った。

「こんなに低い椅子から落ちて、首を折るのは容易いことなんですか？大した高さじゃない
ですよ。もしかしたら事故じゃないんじゃないかと思うんです。こういう可能性はないでし
ょうか、もしかして…」

「自殺ですか？」医者は顎を撫でた。「こんなやり方で自殺する人は聞いたことがありませ
んよ。これは事故です。間違いないと思いますよ。」

「自殺だというんじゃないくて、」ボブは、壁にかかっている時計を見上げて口ごもった。「言
いたかったのは、他の何かかってことです。」